

# 功績賞贈呈

(写真：敬称略)

本会選奨規程第 7 条（電子工学および情報通信に関する学術または関連事業に対し特別の功労がありその功績が顕著である者）による功績賞（第 75 回）受賞者を選定して、次の 5 名の方々に贈呈した。



安藤 真

## 推薦の辞

安藤 真君は、昭和 54 年に東京工業大学大学院博士課程を修了され、同年日本電信電話公社（NTT）に入社されました。横須賀電気通信研究所に勤務された後、昭和 57 年に東京工業大学工学部電子物理工学科助手とされました。昭和 60 年に同電子物理工学科助教授、昭和 62 年に同電気電子工学科助教授、平成 7 年に同電気電子工学科教授、平成 12 年に同大学院理工学研究科電気電子工学専攻教授とされ、現在に至っております。

同君は日本電信電話公社横須賀電気通信研究所並びに東京工業大学において、長年にわたり、最先端のアンテナ・電波伝搬・電磁界理論の研究に積極的に取り組み、多くの顕著な功績を上げられ、また学生の指導・育成に組み込まれ、多くの優れた卒業生を社会に送り出しました。具体的には、まず電磁界理論の研究を推進し、回折現象の解明、反射鏡アンテナの設計に新しい手法と解釈を与えるなど、高周波回折理論の確立に先駆的役割を果たしました。続いて、アンテナ・伝搬の分野で、高能率平面アンテナの開発を推し進め、国際的にも新しい工学分野を確立しました。特に、先進的なラジアルラインスロットアンテナの研究から実用化に至るまで多くの業績を上げられ、その成果は衛星放送受信アンテナ、プロセス用プラズマ励振アンテナ、惑星探査衛星「あかつき」「はやぶさ 2」搭載データ伝送アンテナとして多くの分野で実用に供され、この分野の発展に大きく貢献しました。また後進の指導育成に努めるとともに、現在においても我が国のミリ波無線通信の推進とその普及に

主導的役割を担っております。

同君の功績は電波科学・電波工学全体の広範に及び、総務省情報通信審議会専門委員、経済産業省総合資源エネルギー調査会臨時委員、日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員（電気・電子工学）を務めるなど国の電波行政や学術創成にも多大な貢献をなされるとともに、IEEE Antennas and Propagation Society の President や国際電波科学連合（URSI）の Commission B 委員長、更に URSI の副会長など、国際的な学術団体の要職を務めるなど、この分野における日本及びアジアの国際的貢献を世界に示しました。本会においては、研究専門委員会委員長、編集特別幹事、エレクトロニクスソサイエティ会長、本会副会長として、ソサイエティをまたぐ活動で本会の発展に貢献しました。特に本会のアンテナ伝搬ワークショップシリーズやアジア地域の基幹会議に発展したアンテナ・伝搬国際会議（ISAP: International Symposium on Antennas and Propagation）など、多くの学術会議事業の企画・運営に独創的な発想で取り組み、その立ち上げ・定着化に中核的な役割を果たしました。

これらの業績により同君は本会学術奨励賞・論文賞・業績賞、電気通信普及財団賞、井上学術賞、電波功績賞大臣表彰、情報化促進貢献総務大臣表彰などを受賞されました。また本会並びに IEEE からフェローの称号を授与されています。

以上のように、同君のアンテナ・電波伝搬・電磁界理論分野をはじめとする電子情報通信分野の発展への貢献は極めて顕著であり、本会の功績賞を贈呈するにふさわしい方であると確信致します。



齊藤 忠 夫

## 推 薦 の 辞

齊藤忠夫君は、1963年3月に東京大学工学部電子工学科を御卒業後、大学院修士課程、博士課程を経て、1968年4月に東京大学工学部講師に任官されました。以後、1969年に助教授に昇任、1986年7月に教授に昇進されました。東京大学において、通信の高度化、コンピュータネットワークなどの分野における教育・研究に従事するとともに、教育用計算機センター長、大型計算機センター長、情報基盤センター長として東京大学の情報サービスの整備に努力され、大学全体の研究教育環境の高度化に努められました。2001年3月に東京大学を定年退官され、名誉教授の称号をお受けになった後は、産業界でのICTの発展に寄与すべくトヨタIT開発センターCTOとして、引き続き研究と後輩の指導に活躍されています。

同君の研究業績は、デジタル交換方式、通信網同期、大容量パケット交換、回線割当制御方式、プロトコル工学、ハブ形ローカルエリアネットワーク、コンピュータネットワークなどの情報システムの基礎のほか、多様な社会システムの構築を含め多岐にわたっています。デジタル交換方式では、同君の研究を原型とした交換網は1975年以降世界のデジタル交換機の標準になりました。この研究に関して研究したキャパシタ形の記憶素子を発明し、同じ回路によるメモリはCMOSメモリとして、今日の電子技術の基本となっています。

また同君は、文部省学術国際局科学官を7年間勤められたほか、文部省、通商産業省、国土庁、郵政省、総務省、内閣府などの多くの審議会等に委員・専門委員として参画されました。特に郵政省・総務省においては、電気通信審議会会長代理、電気通信事業部会長、技術分科会長として、インターネット時代にふさわしい事業体系の構築に貢献されました。ADSLの環境整備、全国光

ファイバ化計画、携帯電話番号の10桁化、相互接続ルールの法制化、優先接続（マイライン）制度、携帯ナンバーポータビリティなどは同君の主導によるものです。自治体情報処理システムでは自治体ごとに独立して開発されていたシステムを標準化し、システムの高度化を可能にされました。警視庁においては1970年代初頭、都内7,000の信号機をコンピュータ制御するシステムの設計に参与し、都内交通の円滑化に寄与されました。

学会の国際活動でも同君は国際情報処理連盟（IFIP）において1993年からTC-6（通信システム）の日本代表を務めるほか、2005年から全体会合の日本代表を務めておられます。

これらの業績は、本会からの稲田賞、2回の論文賞、業績賞、フェロー称号、名誉員称号、電気学会からの論文賞、2回の郵政大臣表彰並びに電波の日総務大臣表彰、市村賞貢献賞、前島賞、IEEEからのライフフェローの称号などにより国内外から高く評価されております。

本会においては、1980年以来、ハンドブック委員会幹事、幹事長、副委員長、委員長として8冊のハンドブックの出版に寄与されました。1999年度には通信ソサイエティ会長、2001～2002年度には本会副会長を務め、アジア地域における本会の活動強化に向けて地域代表者会議を立ち上げるなどの貢献をされました。更に、2005年度には本会会長として、論文誌を紙ベースによる配送からオンラインジャーナルに切り替え、会員に対しては和英両方のオンラインジャーナルが閲覧できるようサービスの改善に努められました。

以上のように同君の本会の発展と、我が国の電子情報通信技術の発展に寄与された功績は極めて顕著であり、ここに同君に本会の功績賞を授与するよう推薦致します。



土井 美和子

## 推薦の辞

土井美和子君は、1977年東京大学工学部電子工学科を卒業、1979年東京大学大学院工学系研究科電気工学専攻修士を修了し、同年、東京芝浦電気株式会社（現（株）東芝）に入社されました。2002年東京大学から工学博士の学位を授与、2008年から（株）東芝研究開発センター首席技監、現在に至っておられます。また、2012年大阪大学大学院情報科学科招へい教授も務めておられます。企業の研究者としての業績は特筆すべきものがあり、また電子情報通信の分野における女性研究者の先駆けの一人として活躍されています。

同君は、一般ユーザが計算機を当たり前のように使う時代に備えてヒューマンインタフェース（HI）技術の研究開発を東芝において推進し、プログラムなしに計算機を使って文書やプレゼンテーション資料などの作成、翻訳などを容易に行える HI 技術の実用化を行いました。

研究開発した主要技術は、テキストと関連させてレイアウトを決定する「図表のアンカリング技術」、見出しの判別から章節などの文書構造を抽出する「文書構造の抽出技術」、原文と訳文の対照が容易な「機械翻訳編集技術」などです。「図表のアンカリング技術」は、文書の中で図表を参照する段落に錨（アンカ）を打ち込むことにより、段落の位置変更により、図表が自動的に追従する技術です。「文書構造抽出技術」は、文書を解析し、自動的に章番号や箇条書きの記号などの書式を合わせる機能を実現するもので、現在は文書のオートフォーマット機能として広く利用されています。「機械翻訳編集技術」では、翻訳作業において原文と訳文の照合と編集が簡単に行える対訳編集機能を実現しました。

これらの先駆的技術は、東芝製品に限らず、全世界での MS-Office あるいはその互換文書関連ソフト、Web ページ作成ソフトで実施されています。また、世界初の携帯電話による道案内サービス ekitan.com などのサービス開発をはじめ、海外 170 件、国内 165 件の特許取得など、HI 技術の振興に大いに貢献しています。

本会においては、長年企画室委員を務め、電子ジャーナルの有料化 WG リーダーとして 2005 年の有料化を推進しました。ほかに企画理事（2005～2006 年度）、総務理事（2013～2014 年度）、クラウドネットワークロボット研究専門委員会副委員長などとして、学会の運営と活性化に尽力されています。また、2007 年に情報処理学会副会長を、2012 年に電気学会副会長を務められたほか、総務省情報通信審議会委員、第 20 期日本学術会議会員、第 22 期、第 23 期日本学術会議会員、第三部幹事、など技術振興、学術振興に関わる各種会議において重要な役職を歴任されています。

開発した「図表のアンカリング技術」はソフトウェア技術で初の全国発明表彰を受賞し、一般ユーザによる文書作成市場発展の端緒となりました。また、文書処理における HI 技術開発による情報処理分野の発展に貢献した功績に関して、「情報通信月間」総務大臣表彰、科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞を受けるとともに、「文書処理におけるヒューマンインタフェース技術の開発と実用化」により本会業績賞、フェロー、更に、情報処理学会功績賞、同会フェロー、IEEE フェローなど合わせて 19 件の表彰を受賞しています。

以上のように、同君のヒューマンインタフェースに関する研究業績に加え、本会及び電子情報通信分野の発展への貢献は極めて顕著であり、本会の功績賞を贈るにふさわしい方であると確信致します。



西尾 章治郎

## 推 薦 の 辞

西尾章治郎君は、1980年京都大学大学院工学研究科博士後期課程を修了し、工学博士の学位を取得されました。その後、1980年京都大学工学部助手、1988年大阪大学基礎工学部助教授、1992年同大学工学部教授、2002年同大学大学院情報科学研究科教授に就任され、現在に至っておられます。その間、大阪大学において、サイバーメディアセンター長（2000～2003年、及び2013年～現在）、大学院情報科学研究科長（2003～2007年）、理事・副学長（2007～2011年）を歴任されています。

近年、電子化された超大量のデータ（ビッグデータ）を社会・経済・文化活動、科学技術・学術振興、更には日常生活等に有効利用するための「データ工学」の研究の重要性が非常に高まっています。この分野において、同君は、急速な発展を続ける情報システム・ネットワーク環境における「データ管理技術」、「データベースモデル化」、大量データからの「データ発掘技術」の三つの重要課題を中心に世界的に顕著な研究業績を上げ、この分野で永年にわたる人材育成を通じて、国際的に活躍する多くの研究者を輩出してこられました。特に、最近のクラウドコンピューティング環境を予見したデータ管理技術、最も強力なデータベースモデルとしての「演繹オブジェクト指向データベース」に関する先駆的な研究など、一貫してパラダイムシフトを先導する優れた研究業績を上げてこられました。その成果の多くは、定説的な概念を覆し、しかも現実システムに立脚した創造性豊かなものであり、データ工学分野の新たな地平をひらくと同時に、実社会における情報システム構築に関わる有用な指針を与えています。

このような卓越した研究業績に対して、紫綬褒章をは

じめ、本会業績賞及び論文賞、情報処理学会功績賞及び論文賞（3度）、日本データベース学会功労賞及び論文賞、立石賞功績賞等の表彰を受けておられます。また、本会、情報処理学会、IEEE からフェローの称号が授与されています。

同君は、本会データ工学研究専門委員長として該当分野の発展に大きく寄与すると同時に、情報処理学会副会長、日本データベース学会会長として国内における情報通信分野の研究振興に多大な貢献をされてきました。特に、本会情報・システムソサイエティと情報処理学会の双方に関わる情報科学技術フォーラム運営委員長として、両会の連携強化の促進に尽力されました。国際的な貢献度も卓越しており、特に、ACM SIGMOD 日本支部の創設に尽力され、IEEE Computer Society データ工学技術委員会アジア代表実行委員、Very Large Data Bases 国際会議運営委員会理事をはじめ、多数の著名な国際会議のプログラム委員長、組織委員、プログラム委員、更に、IEEE、ACM 等が発行する多くの国際的な論文誌の編集委員を務められました。

また同君は、文部科学省科学官、日本学術会議会員（第22期情報学委員長）、内閣府総合科学技術会議専門委員のほか、文部科学省科学技術・学術審議会関連の多くの委員会・部会の委員、独立行政法人科学技術振興機構研究主監、独立行政法人日本学術振興会産学協力総合研究連絡会議委員などの要職を歴任あるいは現在任務遂行中であり、我が国の電子情報通信分野の研究・教育の振興、産学連携分野の発展に大きな役割を果たしてこられました。

以上のように、同君の学会活動を含めた電子情報通信分野の発展及び国際化への功績は、極めて顕著であり、本会の功績賞を贈るにふさわしい方であると確信致します。



安田 浩

## 推薦の辞

安田 浩君は、1972年東京大学大学院工学系研究科電子工学博士課程を修了し、同年、日本電信電話公社（現日本電信電話株式会社、NTT）横須賀電気通信研究所に入所されました。1978～1979年米国ジェット推進研究所（JPL）客員研究員を務められ、1987年NTTヒューマンインタフェース研究所画像メディア研究部長、1992年NTT企業通信システム本部開発部長、1995年NTT理事・情報通信研究所長を経て、1997年東京大学先端科学技術研究センター教授に就任されました。2003年東京大学国際・産学共同研究センター長、2007年東京電機大学未来科学部情報メディア学科教授に就任され、同年東京大学名誉教授の称号を与えられました。2008年東京電機大学総合メディアセンター長、2011年東京電機大学未来科学部長を経て、現在に至っております。

同君は特にデジタルコンテンツ流通、具体的には画像符号化技術、コンテンツIDとそれをを用いたコンテンツ検索・管理保護技術、ネットワークセキュリティ技術、デジタルコンテンツ作成支援技術等で数多くの功績を上げ、日本のみならず世界の情報通信分野の発展に多大なる貢献を果たしました。

画像符号化の分野では、後の静止画像符号化標準JPEGや動画画像符号化標準MPEGの必須技術となる、複数の予測器から予測誤差最小となる適応予測方式の発明、世界初となるフレーム間符号化方式の開発等、世界最先端の成果を上げました。この業績により1991年に画像符号化の国際標準化組織ISO/IEC JTC 1/WG 8（現SC 29）議長に就任され、JPEG及びMPEG策定の中心的・先導的役割を果たしました。国際標準方式は唯一で

あるべきとの信念を貫き、国や企業の利害を超えて一切の妥協を許さず統一方式を国際標準として定めた結果、JPEGはデジタルカメラ、MPEG-2はDVDや地上波／衛星デジタル放送、MPEG-4 AVC / H. 264はBlu-ray Disk、ワンセグ放送やIPTVに広く用いられ、まさしく世界が統一標準の恩恵に預かっています。

デジタルコンテンツ流通の分野では、ネットワーク上での映像配信技術の標準化を推進するDigital Audio Visual Council (DAVIC) プレジデント、コンテンツの健全な流通のための管理・保護を目的としたコンテンツIDフォーラム会長等を歴任し、映像配信ビジネスの立ち上げに大きく寄与しました。また2005年に〔ISC2〕CISSPを取得しセキュリティ専門家としての活動も開始し、内閣官房情報セキュリティ政策会議セキュリティ文化専門委員会委員長等、政府関係の要職を歴任しました。

これらの功績により、1996年米国テレビ技術科学アカデミーエミー賞（技術開発部門）、1998年IEEEフェロー（2010年ライフフェロー）、2000年IEEE Charles Proteus Steinmetz賞、2002年情報通信月間総務大臣表彰、2009年紫綬褒章、2013年高柳記念賞など、数々の著名な賞・褒章を授与されています。本会では、1995年業績賞、2000年フェロー、2013年名誉員を授与されています。また、1987～1988年度編集特別幹事、2001～2002年度会計理事、2006～2007年度副会長、更には2011年度会長を歴任され、本会活動の発展に尽力されました。

以上のように、同君の情報通信分野並びに本会における貢献は極めて顕著であり、本会の功績賞を贈るにふさわしい方であると確信致します。